

障害福祉従事者に求められる「チームで支える意思決定支援」 研修を開催しました。(令和6年11月23日 吉備国際大学)

講師 淑徳大学 鈴木敏彦氏
(淑徳大学副学長・教授・地域共生センター長、社会福祉士)

【講義】



研修の冒頭、講師より、津久井やまゆり園での事件と、その後の入所されていた方々への意思決定支援の取り組みを語っていただきました。

これからの「暮らし」を決めるために、時間をかけ、丁寧に「本人の意向」の聴き取りを重ね、その人への意思決定支援に必要な情報を「これまでの記録」等からも確認されてきた支援チームでの取り組みの紹介がありました。また、次の新たな「暮らしの場」の準備のためには「一定の期限」があり、物理的な制限の中で「代行決定」せざるを得ない方がいたことも語られました。さらにチームで、その人にとっての「better」と思われる決定を行いながら、支援者の方々が、さまざまな気付きと後悔との背中合わせだったことも伝えられました。

これらの話を通じて、私たち支援者が意思決定支援をしていくときに何が大切かについて考えました。自らの支援に安易に満足せず、アセスメントやモニタリングを繰り返す必要があります。その中で、本人がこれからの「暮らし」を決めるということを常に支援できているのか問い続けていきたいと思いました。

また、研修の中で「意思決定支援ガイドライン」について確認と周知がありました。決して難解な内容ではなく、支援者の誰もが目を通していただき、自らの取り組みを振り返る機会にしていいただければと思います、ここでも紹介させていただきます。

→障害福祉サービス等の提供に係わる意思決定支援ガイドライン

(2017.3 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部)

[https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000159854.pdf)

[12200000Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000159854.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000159854.pdf)

【実践報告】



実践報告では、最初に日中サービス支援型グループホームくふうの家より、入居者の「それぞれの希望」を聞き取りしながらの、個別、小グループ、全体で、さまざまな活動報告がありました。

次に、相談支援事業所きららより、退院支援をはじめ、揺れ動く本人の気持ちに寄り添う中での、相談支援専門員としての迷いや葛藤と、それらの不安を互いに支えてくれた支援チームのあり方を紹介いただきました。

続いて、淡路市児童発達支援センターひだまりからは、家族や周囲の大人と、本人の思いの「ズレ」への気づきを促す関わり等を事例をまじえながら報告いただきました。

最後に、淡路圏域コーディネーターからは、これまでの様々な場面での家族や支援者への支援について紹介いただきました。

家族向けには、可視化シートを用いての本人及び家族の将来への見通しへの気づきの促しや、意思決定支援の主体を「親から子ども」へ徐々にバトンタッチしていく必要性を伝えています。また支援者向けには、事例検討を通して情報整理をしながら意思決定支援に必要なアセスメントのポイントへの気づきの促しや、「本人参加の会議」開催をすすめています。

いずれの報告も、日々の中での小さな取り組みを丁寧に積み重ねながらの実践であり、ひとつひとつの「決める」という行為が、その人にどのような変化を生んでいるのかを考えさせられる内容でした。

【意見交換】



講義・実践報告を受けて、多職種の方々での意見交換も実施されています。

意見交換の中では私たちの支援は、誰かに「より良き暮らしをさせるため」ではなく、本人が「自分らしさを自分で選び、自分で納得できる暮らしをすること」を応援することであり、研修全体を通して、改めて自分自身を振り返ることができたという声が聞かれました。

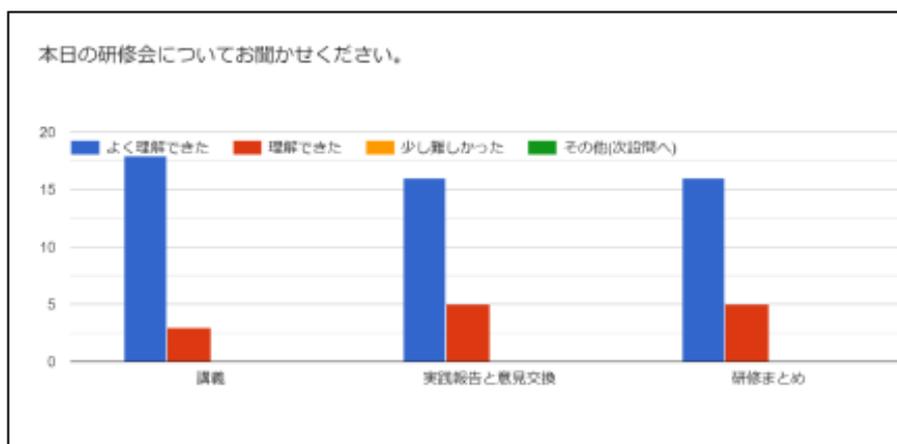
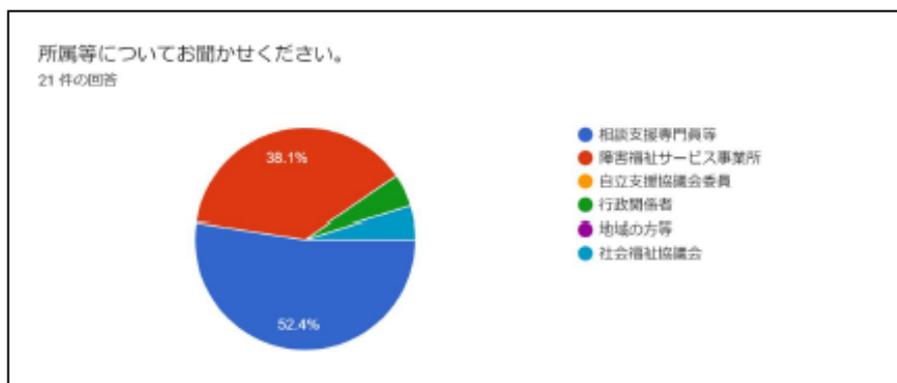
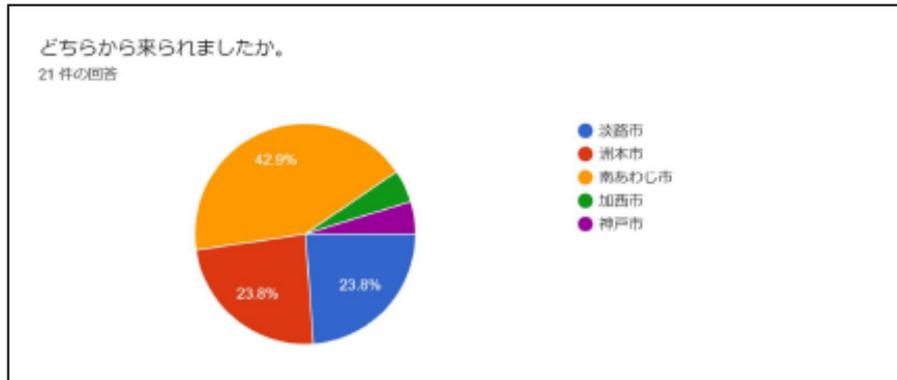
研修をふまえてグループワーク内で話し合ったことや、アンケート結果一部を掲載させていただきます。

淡路障害者自立支援協議会では、今回の研修を活かしながら、今後も「意思決定支援」の取り組みを「チーム」ですすめてまいりたいと思っております。

アンケート結果掲載

令和6年度淡路障害者自立支援協議会 理解促進研修「チームで支える意思決定支援」研修まとめ

令和6年11月26日実施
申込者60名
(アンケート回答21件)



アンケートより(一部抜粋)

- これまでに、「意思決定支援」に関して、ご自身が「取り組まれていたこと」や「大切にされていたこと」があればお聞かせください。
 - ・ とにかく本人の思いに耳を傾けること。子どもの分野は必ず保護者の思いが関係してくるので、保護者の思いには共感しつつ、それが必ずしも子どもの思いとは一致しないことを意識して関わっている。
 - ・ 普段の会話から相手の方がどんな風に色々な物事を見聞きしたり、感じ取っているのかを知るため、否定せず一旦受け止めるように心がけている。
 - ・ 利用者のこれまでの経歴、アセスメント、本人への確認などをして、色々な面から利用者を見ていくこと。
 - ・ 意思表示が難しい方の場合、日常的な選択場面を繰り返すことで、選択する事が出来るように支援を心がける。
 - ・
- これまでに、意思決定支援の場面において直面した困りごとがあればお聞かせください。
 - ・ 表面的な言動だけを受け止めてしまい、上手くいかないところがあった。
 - ・ 間接的にご本人の思いを伺うことがあるが、明らかに支援者の思いが混在している時がある。
 - ・ 利用児童が思いを表出できないときに、職員や保護者、いろいろな人が関わり本人の思いを考えていきながら関わるが、本当にこの関わりでいいのかと悩みながら関わっています。
 - ・ 本人だけでなく家族も課題を抱えている場合など、「困り感」が誰のものなのかが分からなくなる場合がよくあります。また大事なことについて本人に意思確認したいと思っても、時間が待てないことで支援者が急かしてしまう場合があり、本当の気持ちはどうだったのか後から「これでよかったのだろうか」と悩んでしまうこともあります。
- 本日の研修を受けての「新たな気づき」や「取り組んでみたいこと」があればお聞かせください。
 - ・ 日常生活場面での「小さな意思決定」の積み重ねが、社会生活場面での「大きな意思決定」につながるという事が分かった。どんな些細な事でも意思決定できる支援をしていきたい。また、意思決定支援者の支援力によって変化することにも注意していく。
 - ・ 支援者があきらめてしまえば、本人の意思の表出ができないままになってしまう。長い時間がかかっても、本人の意思が表出できるような支援が必要。それは1人でするのではなく、チームで取り組んでいく。
 - ・ ご利用者一人一人の合理的配慮を考えた意思決定支援。

グループワークより(一部抜粋)

(感想・意見)

- ・ 支援者は長い経過の中で変わっていくので「支援をつなぐ」+ 思いをつなぐということは意識できてなかった。とても重要な役割になっていると感じた。
- ・ 「支援者が決めるのが当たり前」という所もあったが、それはおごりで本人の為ではなかったこと反省。
- ・ 意思決定支援:意識してやっていく必要性を感じた。本人にわかりやすく伝えること。小さい→大きい選択。いっぱい提起していかないといけない(人によって選び方が違うので特性を理解しながら支援していく)。
- ・ 意思決定→(自分で表出できない方において)感覚じゃなく日々のエピソードを集めて根拠に。
- ・ 高齢・障害の人、(意思決定)ベースは同じだが家族が先まわりして優先して決めてしまっていることもケースとしてある。
- ・ ケース検討をやっていると”誰”の困りごとなのかみえなくなっているのが、たちかえっているようにしている。

(取り組んでいること)

- ・ 日常生活の自立→将来につなぐステップの段階。いろんな経験をさせてあげたいサビ管の思い。選択するためには経験が大事(知らないと選べない)
- ・ 受け入れる時に情報が少ない。今だけでなく、過去の情報がなくて、シート(継続)があればチームで支援できる。チーム支援の中で過去の情報も支援者間で引き継いでいく。

(課題)

- ・ どうすれば意思決定支援を進めることができるか。そのことを自分に問う機会になった。自分たちも小さなことを積み重ねていく。
- ・ 選択方法、準備・工夫は個々によって異なるのが難しい。限定してしまわないか、皆と一緒に良いといってもそれは本当か?関りが長くなると、支援者の決めつけが強くなるのでは。
- ・ 小さい頃からの積み重ねとして、支援をつないでいくことの大切さ。